

称号及び氏名 博士(看護学) 三澤 寿美

学位授与の日付 平成25年3月31日

論文名 三世代同居家族の祖母の子育て支援を促進する教育プログラムの開発と評価
Development and evaluation of a nursing intervention program to promote child care support for grandmothers in the three generation families

論文審査委員 主査 町浦 美智子
副査 上野 昌江
副査 中山 美由紀

論文内容の要旨

【目的】

三世代同居家族で子育てする母親を支援する祖母の子育て支援を促進する教育プログラムを実践し、祖母のサポート提供の状況、役割受容、自己肯定感、主観的QOLと、サポート提供を受ける母親の母性意識の観点から、教育プログラムの効果を明らかにする。

【方法】

研究デザイン: 教育プログラムの介入群と、対照群を設定した縦断的準実験研究とした。

研究協力施設: A 県内にある設置主体が同一の周産期医療施設 2 施設において、データ収集ならびに教育プログラムを実施した。2 施設とも対照群のデータ収集を行った後に、介入群のデータ収集および教育プログラムを実施した。

対象者: はじめて子どもをもつ母親と子育て支援者となる同居の祖母（母親の義母または実母）を1組とし、介入群、対照群ともに20組を対象とした。

教育プログラム: 介入群の祖母には、母親の妊娠後期、産後1か月、産後3か月に教育プログラムを実施した。教育プログラムでは、講義形式で母親の身体的・心理的・社会的変化、子どもの成長発達、子育て方法に関する知識を提供し、ディスカッションまたは面談を行った。対照群の祖母には、母親の妊娠後期に教育用パンフレットのみを配布した。

データ収集項目: 教育プログラムの効果を祖母の子育てサポートの提供の頻度、役割受容は役割受容尺度（三川，1990）、自己肯定感は自己肯定感尺度（樋口ら，2002）、主観的QOLは生活満足度尺度K（Life Satisfaction Index K: LSIK）（古谷野ら，1990）と、母親の母性意識は母性意識尺度（大日向，1988）を用いて、母親の産後1か月、3か月、6か月

に測定した。母親の産後 6 か月に、インタビューにより祖母の子育て支援に対する考えや思い、祖母としての役割受容、役割達成、役割満足、生活満足、幸福感を補足データとして収集した。

データ分析方法：介入群と対照群の 2 群間で、時期、祖母の職業の有無、祖母と母親との関係による祖母のサポート状況、祖母の役割受容、自己肯定感、主観的 QOL、母親の母性意識についてノンパラメトリックな統計手法により比較した。また、教育プログラム参加の影響について産後 6 か月の母親の母性意識を教育プログラムの効果として重回帰分析により検討した。統計処理は、統計解析プログラム IBM SPSS Statistics ver19.0 for Windows を用い、有意水準は 5%とした。

倫理的配慮：本研究は大阪府立大学看護学部研究倫理委員会の承認を受けて実施した。研究協力施設および研究協力者に対して研究の意義、目的、方法、研究協力の自由意思、匿名性の確保とプライバシーへの配慮等について文書を用いて説明し、承諾書への署名により研究の同意を得た。

【結果】

介入群は 11 組であり、祖母の平均年齢は 59.1 ± 7.3 歳で、義母 6 人 (54.5%)、実母 5 人 (45.5%)、就業している祖母 7 人 (63.6%)、専業主婦 4 人 (36.4%) であった。母親の平均年齢は 30.7 ± 5.0 歳であった。

対照群は 17 組であり、祖母の平均年齢は 57.7 ± 7.3 歳で、義母 9 人 (52.9%)、実母 8 人 (47.1%)、就業している祖母 13 人 (76.5%)、専業主婦 4 人 (23.5%) であった。母親の平均年齢は 29.8 ± 6.3 歳であった。いずれにも両群間で有意差はなかった。

両群間で祖母の母親への手段的サポート、情緒的サポート、評価的サポート、情動的サポート、代弁的サポートの頻度に有意差はなかった。介入群において祖母の手段的サポートの頻度と母親の肯定的・積極的母性意識は、産後 6 か月が産後 1 か月、産後 3 か月よりも有意に高かった。また、産後 1 か月の無職の祖母の手段的サポートの頻度は有職の祖母よりも有意に高かった。

介入群の祖母の役割受容、自己肯定感、主観的 QOL に変化はなかったが、産後 6 か月では、祖母の役割受容が高ければ主観的 QOL が有意に高く、祖母の役割有能感が高ければ母親の肯定的・積極的母性意識が有意に高かった。祖母が教育プログラムに参加する影響を重回帰分析により検討したところ、産後 6 か月の肯定的・積極的母性意識は介入群の母親が対照群の母親より有意に高く、否定的・消極的母性意識は有意に低かった。

【考察】

祖母の教育プログラムへの参加は、産後 6 か月の母親の肯定的・積極的母性意識を向上させ、否定的・消極的母性意識を低下させる可能性が示唆された。祖母の母親へのサポートの直接的な増加にはつながっていなかったが、祖母の子育て支援を促進する教育プログラムは、同居する祖母が母親の選択や意思決定をサポートすることを重視したことによって、子育てを行う母親の子育ての状況を考慮し、母親へのサポートのあり方や態度を考えた祖母の行動につながったと考える。そのため母親は日常的な生活のなかで、祖母から支

持され、見守られ、尊重されていると感じながら子育てをすることができたため、母親としての肯定感や自信をもてるようになり、母性意識の向上につながったと推測する。さらに、祖母がサポートを継続していくためには、祖母の役割満足感や幸福感に関連する情緒的サポート、情動的サポート、評価的サポートができていくという認識をもてるようなアプローチが必要であると考えられた。

本研究では、サポートの効果を子育て開始から 6 か月間のみで評価したが、子育ては子どもが自立するまでの長期間に及ぶことから、今後は祖母の役割受容と母性意識を子どもの成長発達段階の時期ごとに評価しながら、継続的な教育プログラムを実施する必要がある。また、祖母のサポート状況、役割受容、主観的 QOL ならびに母親の母性意識について具体的に把握でき、より簡便に評価できる評価指標の検討が必要であると考えられる。教育プログラムの実施と活用については、脱落率を考慮して祖母が参加しやすい場所や時間を設定するなどの企画を検討するほか、現在実施されている女性外来、更年期・老年期女性を対象とした健康教室、母親学級・両親学級にプログラムの内容を追加する、プログラムで使った資料を配布するなど実現性・実用性を考慮することが重要である。

学位論文審査結果の要旨

本研究は祖母のサポート提供の状況、役割受容、自己肯定感、主観的 QOL と、サポート提供を受ける母親の母性意識の観点から、三世同居率の高い地域において、祖母の子育て支援を促進する教育プログラムの効果を明らかにした。本研究の強みは、祖母と母親をペアとして介入群 11 組、対象群 17 組を対象にした妊娠後期から産後 6 か月にわたる縦断的準実験研究であること、単発的な育児知識や技術の学習に偏ることなく、祖母の心理的、内面的な側面にも着目したことであり、社会的にも祖母の子育て支援が話題となっている中で独創性の高い研究である。

教育プログラムの効果として、祖母の手段的サポートの頻度と母親の肯定的・積極的母性意識は、産後 6 か月が産後 1 か月、産後 3 か月よりも有意に高かったこと、産後 6 か月では、祖母の役割受容と主観的 QOL、祖母の役割有能感と母親の肯定的・積極的母性意識が有意な正の相関関係を示したこと、さらに、重回帰分析により祖母が教育プログラムに参加する影響として産後 6 か月の肯定的・積極的母性意識は介入群の母親が対照群の母親より有意に高く、否定的・消極的母性意識は有意に低いことが明らかになった。

これらの結果から、教育プログラムの効果は特に母親への影響があることが検証された。今後、この教育プログラムを実践するには介入期間の長さ、介入内容、測定指標を検討するなど課題はあるが、祖母自身の役割受容や主観的 QOL、母親の母性意識を高める可能性があり、医療機関のみならず地域においても適用できる成果が得られたと評価する。

予備審査および本審査の結果をうけて論文の修正がなされており、論文は長期にわたるデータ収集、介入の結果を緻密にまとめ、丁寧な文献検討や研究方法の記述、分析方法の適切さ、今後の課題の明確さなどに加えて論旨が一貫している点で優れた論文である。以上のことより、本論文は女性の健康と看護における実践・研究の発展に寄与する学術的に価値ある論文であり、博士（看護学）の学位を授与するに値する論文として認める。